

編集委員が選んだ本

『日本という国』

小熊英二／理論社／2006年3月／1260円
もし生徒たちから、「なぜ、戦前の日本は、他のアジア諸国と協調・同盟する道でなく、アジアを侵略する道を選んだのですか。」とか、「どうして、いまの日本の政治や外交は、アメリカべったりなんですか。」と聞かれたとして、なるべく平易に、そして説得力のある回答を行おうとしたら、どうしますか？

著者は、戦前の大日本帝国や、戦後の日本国のありようを説明しようとして、上記2つの切り口で語っている。それが、ほとんどの漢字にルビのついた、186ページの、わかりやすい文章で展開され、しかも後者のテーマの冒頭には、18ページにわたる、ひじょうに鋭い「戦争がもたらした惨禍」という項目がおかれている。歴史に学ぶことの大切さが、心に迫る。これだけ平易に書かれた文章に、ご驚嘆あれ。

『日本人の朝鮮観 その光と影』

琴秉洞／明石書店／2006年10月／3780円
近世以降、韓国・朝鮮と関わりをもった58人の日本人の評伝である。閔妃暗殺に係わった与謝野鉄幹や、戦争賛美の歌を歌うようになった与謝野晶子、「知的野心無き彼の薄弱たる女性的国民」と朝鮮を評した新渡戸稲造などを取り上げる一方、植民地下朝鮮人の権利擁護に努めた弁護士布施辰治や、朝鮮永久中立論を展開した思想家江渡狄嶺を紹介するなど、「在日」の筆者ならではの鋭い視点が随所に見られる。2002年に刊行された『朝鮮人の日本観 - 歴史認識の共有は可能か』（総和社）と併せて読むことをお勧めする。

『憲法九条を世界遺産に』

太田光・中沢新一／集英社新書／2006年8月／693円
至極本質的で、示唆に富む好著。「なぜ宮沢賢治が田中哲学たちの思想に傾倒したのか」を切り口に、たやすく戦前に回帰しがちな日本人の思想的土壌に迫る。「自分の考えていることを、思い切っちゃべらなくなるって」時代に警鐘を乱打した、知的冒険の書。

『我、自衛隊を愛す 故に、憲法9条を守る』

—防衛省元幹部3人の志
小池清彦・竹岡勝美・箕輪登／かもがわ出版／2007年3月／1470円
元政務次官の故箕輪登氏（自衛隊イラク派兵差し止め訴訟を起こされた）・元官房長の竹岡勝美氏・元教育訓練局長の小池清彦氏の血涙の書。
いまの改憲策動が「アメリカの押しつけ」であることが、よくわかるし、「奉仕の強制は徴兵制に通じる」などの指摘は、防衛省元幹部の発言だけに、刮目に値する。

『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』

内田樹／講談社／2007年1月／1470円
「自分探しの旅」とは、「私」についてのこれまでの外部評価をリセットすること。社会的な有用性よりも、自分の興味関心を基準にした行動につながっている。また、「何のために勉強するのか？この知識は何の役に立つのか？」という問は、有用無用についてその人自身の価値観の正しさを基準に自己決定すること（それがどんな不利な未来でも「自己責任」）。……こうした市場原理優先の発想（「アメリカン・モデル」）や、「均質的な社会を多様化しよう」とする発想（が、かえって均質化を招く）が、学習・労働・育児などでこれまでとは違う考え方をする新しいタイプの日本人を増殖させている。これは社会的危機である。救うカギは「支えあう（親密感）社会の再構築」ではないか。著者は、学力低下・ニート増加の深層を分析し、コンビニエンスな文明・利器から距離を置いた「身体性の教育（修行）プログラムのようなシステム（伝統的な教育技術）が必要ではないか」と問う。「24時間365日」「IT万能」の価値観を問い直す好著である。

『財政のしくみがわかる本』

神野直彦／岩波ジュニア新書／2007年6月／819円
「映画の料金は市場原理で決まるので高いが、プールの料金は補助金が出るので安い、それはなぜか？」スウェーデンの中学生が学ぶ教科書の記述である。ここから財政の役割について考えさせようというのである。「市場原理」という言葉が跋扈し、「小さな政府」は公共サービスから手を引こうとしている。市場経済は効率を要求し、格差を容認する。一方、民主主義は公正を追求し、格差の是正を要求する。市場原理をどのように民主的な方向でコントロールしていくのか、それこそが財政の果たす最も重要な役割であることを再確認させてくれる。

『あいまいな日本の不平等』

西いずみ／ブクマン社／2007年3月／1260円
「自分を大切に思うからこそ、自分と違う立場に置かれている人に目を向ける必要がある」。——著者は、2006年末現在における日本の国の不平等な現状について、具体的なデータを取り上げて紹介している（例えば、「このまま税制改革が進めば、年収300万円世帯の税負担は30倍に!?」、「国の借金827兆円！なのに、なぜ大企業への減税は2兆7770億円!?」）。そして、「格差を感じる人がいれば、その人に光を当てるのが政治の役割だ」という所信表明演説とは裏腹な政治をおこなう安倍内閣に身を委ねてしまう危険性を説く。不平等と格差の事実を知る、それはどんな理由で正しくないのか、どこを直すべきか、直せないのなら何で償うべきか。冷静に見極める材料が提供されている。教室で、職場で、話題に取り上げたい。